演題2．頬粘膜のverrucous carcinomaの1例

○澤田　剛光，中谷　寛之，星　　秀樹，
杉山　芳樹，佐藤　泰生*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座，
同口腔病理学講座*

緒言：verrucous carcinomaは，口腔内に発生する扁平上皮癌の約5%と比較的まれな疾患である。今回我々は左側頬粘膜に発生したverrucous carcinomaの1例を経験したのでその概要を説明した。また同症例はペースメーカー埋め込み患者で外科的切除の際，電気メス使用時に注意した点も報告した。

症例：患者73歳女性。左側頬粘膜部の疼痛を主訴に平成16年9月27日，当科初診。現病歴：平成14年4月頃，近医歯科医院にて，義歯作製時左側下顎歯肉から頬粘膜にかけて，白斑指摘され症状改善されず，生検施行。白板症と診断され凍結療法するも，改善されないため平成16年9月27日，本学皮膚科受診。同日当科紹介となる。口腔外所見：顔色良好，顔貌は左右対称であるも，左側下顎臼歯部から顎角部にかけて圧痛認めた。口腔内所見：左側歯肉頬移行部から頬粘膜にかけて，30×20㎜大の白斑病変認め，周囲との境界不明瞭で，一部周囲に硬結認め乳頭状呈していた。処置および経過：平成16年9月27日当科初診，翌日当科入院となり同日生検施行。病理診断はhyperkeratosisで11月19日静脈内鎮静下腫瘍切除術施行。病理組織診断はverrucous carcinoma。その後経過良好にて12月9日退院。電気メス使用時の注意点として，対極板はペースメーカーから離して装着し，電気メスは10㎝以上離して使用した。また10秒以上の持続使用は避け，出力は最低とし，術前にはペースメーカーのレートを一定値に変更した。

考察：verrucous carcinomaの好発年齢は50歳以上で性差は男性に多く好発部位は頬粘膜，歯肉である。病理組織所見では，基底膜が連続的で固有層に浸潤増殖する所見はなく，急性炎を混在するリンパ球浸潤運を認め，特徴的所見を示す症例であったと思われる。今後は，十分な経過観察が必要と思われる。

演題3．成人における短期予防管理プログラムの齲蝕リスクに対する効果

○安藤　　歩，岸　　光男，相沢　文恵，
米満　正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

目的：成人に対する治療前の予防プログラムが口腔内の齲蝕リスクに及ぼす影響を明瞭にするため，主訴に対する治療的介入ありの群，予防管理プログラムのみの群で比較検討した。

対象・方法：2001年から2003年の間に盛岡市某歯科医院を何らかの主訴により初めて受診し，予防プログラムを受けた者（20歳以上の男女109名）を対象とした。予防プログラム開始時に齲蝕リスク検査を行い，齲蝕の評価，プラーク量の評価，による齲蝕リスクの評価を行った。予防プログラム終了後に開始時と同様の齲蝕リスク評価を行い比較検討した。唾液検査にはBML社製の検査キットを用い，口腔レンサ球菌中のSM菌の占める割合（SM），乳酸桿菌量（LB），唾液緩衝能（BF），プラーク量，唾液量，唾液pHを測定した。

結果：予防プログラム開始前と，終了後の齲蝕リスク検査の評価結果を比較したところ，治療的介入ありの群，治療なしの群でプラーク量の低下が認められた（$P<0.000$）。有意ではなかったものの長期予防プログラムと同様にSM，BFのリスク低減傾向がみられた。

まとめ：1．短期予防プログラム後にプラーク量は有意に減少した。2．BFとSMについては統計学的に有意ではなかったが，改善傾向が認められた。3．上記の結果は3年にわたる長期予防管理プログラムと同傾向にあったが，長期のプログラムでより著明であった。以上のことから成人において，予防プログラムがBF，SM，プラーク量の3つのリスクを低減させる可能性が示唆された。今後継続して調査を行うことにより，より明確な関連が明らかになるものと思われた。